

資料

文章完成法による自我発達検査の作成

—Loevinger の WU-SCT の翻案とその簡易化—

渡部 雅之* 山本 里花**

MAKING A TEST OF EGO DEVELOPMENT USING
SENTENCE COMPLETION METHOD

— Translating and Simplifying the Loevinger's WU-SCT —

Masayuki WATANABE AND Rika YAMAMOTO

The purpose of this study was to make the Sentence Completion Test (SCT) of the ego development for Japanese male and female. The SCT (named "WY-SCT") and the scoring manual for WY-SCT (named "WY-SCT Manual") were made based on the theory of Loevinger, J. Samples were 612 Japanese consisted of 333 females and 279 males. Their ages ranged from ten to seventies. The α -coefficient and the interrater agreement with two beginner raters (K, M) were calculated to examine the reliability of WY-SCT. The former was 0.851 and the later was respectively 72.3% (with K) and 70.5% (with M). And the tendency of ego developmental changes shown in this study agreed with some of the preceding researches. These results showed that WY-SCT was useful as a scale of ego development. The improvement of WY-SCT Manual and a longitudinal study were required to use WY-SCT more effectively.

Key Words: Loevinger, J., Ego Development, SCT, reliability, Japanese adolescents and adults

問題と目的

自我発達に関して Loevinger, J. (1966, 1969, 1970) は、自我を全体論的に捉え、その基礎は人が経験に固有の意味を求めることにありと考えた。そして Kohlberg, L. の道徳性発達理論や、Piaget, J. の認知発達理論等を取り入れながら、自我の発達段階として10段階***を示し、各々の段階は一定の順序で進んでゆくものとした (TABLE 1 参照)。その上で自我発達をパーソナリティ研究の中心概念として捉え、知的発達や心理・社会的発達、適応

などの個々の要因と関連を持つが、それらとは概念的に区別されるものとして位置づけている。

また、こうした自我発達の測定にあたっては、測定の道具を通じて得られた反応と、自我発達理論との間に整合性がなければならないと考え、従来のパーソナリティ研究においてしばしばなされてきた量的なアプローチに対して疑問を投げかけた。例えば、社会的望ましさの尺度において低い得点が得られたときに、その意味するところが、同調段階にも達していない未熟な状態とみるか、それとも良心的段階以上の自己内基準に基づく自己批判的傾向からくるものなのかについては、得られた得点からだけでは決定しえないのである。そこでこうした条件を満たす測定の道具として、文章完成法による尺度 (WU-SCT; Washington University Sentence Completion Test) が考案された。この SCT について Loevinger ら

* 滋賀大学 (Shiga University)

** 大阪大学 (Osaka University)

*** (Loevinger は、1970 年の時点では自己保護と同調段階の間に移行段階 (I- Δ /3) が存在するとしたが、1976 年の文献ではその段階については触れられていない。

TABLE 1 自我発達段階の4側面からの特徴 (Loevinger, J.: 1970)

段 階	コード	衝動統制・性格発達	対人関係様式	意識のとりわれ	認 知 様 式
前社会的 共 生 的	I - 1		自 閉 的 共 生 的	自己対非自己	
衝 動 的	I - 2	衝 動 的 報復への恐れ	受 容 的 依 存 的 搾 取 的	身体感情（特に性的 および攻撃的感情）	ステレオタイプ 概念的混乱
自己保護的	△	見つかることへの恐れ 責任の外在化 日和見的	用 心 深 さ ご ま か し 搾 取 的	自己保護, 苦しみ 願望, 具体的物事 利益, 支配	
同 調 的	I - 3	外的規則への同調 規則を破ることに對する 罰や恥	所屬すること 皮相的な良さ	外 見 社会的受け入れ 平凡な感情や行動	概念的単純さ ステレオタイプ きまり文句
自己意識的	I-3/4	規範や目標の分化	集団と関係づけた自己 への気づき 援 助	適応, 問題点 理由, 機会（曖昧）	多 様 性
良 心 的	I - 4	自己評価基準 自己批判 結果に対する罪 長期的目標や理想	集中的, 責任感 相 互 的 コミュニケーションへの 関心	分化した感情 行動への動機づけ 自尊心, 達成 特性, 表現	概念的複雑さ パターン化の考え方
個 性 的	I-4/5	加えて: 個性の尊重	加えて: 情緒的問題としての 依存	加えて: 発達, 社会問題 内面生活と外面生活の分化	加えて 過程と結果との区別
自 律 的	I - 5	加えて: 葛藤する内的要求への 対処 耐 性	加えて: 自律性の尊重 相 互 依 存	生き生きと示された感情 肉体面と精神面の統合 行動の心理的原因 役 割 概 念 自己充実感 社会的文脈における自己	概念的複雑さの増大 複雑なパターン 曖昧さへの耐性 広い視野 客 観 性
統 合 的	I - 6	加えて: 内的葛藤の克服 達成不可能なものの放棄	加えて: 個性の育成	加えて: 同 一 性	

は, 用途に合わせて男女とも3種ずつを準備しているが, この内唯一マニュアルが公開されているのは, Form 9-62と呼ばれる女性用のもの (Loevinger & Wessler; 1970) のみである。これは36項目よりなり, まず評定マニュアルによって各項目反応を評定し, 次いでその36の評定値から, 総合的な自我発達段階を決定するという手続を経る。

Loevinger 理論に関して, わが国では宮下 (1981) が, Form 9-62 とそのマニュアルの邦訳を行った。それを日本人青年女子に対して実施した結果, 「Loevinger らのマニュアルにある広範囲の反応を抽出することができた」が, 「ほぼ同年齢の対象を用いた, Loevinger & Wessler (1970) の結果と比較すると, I - 3 までの累計が Loevinger らでは約10%であるのに対して, 本研究では, およそ25%, I-3/4 までの累計もそれぞれ約50%, 95%とかなりのズレが認められた」と報告している。また佐々木 (1981, a) は, 日本人に対してより適切に用いる

ことのできる, 日本版の自我発達測定用 SCT とその評定マニュアルを作らねばならないという目的から, 項目数を30項目に減らした女性用の SCT と, その評定マニュアルを新たに作成している。さらに佐々木 (1981, b) は, 12項目よりなる男性用 SCT の作成も試みている。

しかし, 項目数を減らした佐々木のマニュアルにおいてさえその内容量は膨大であり, 各項目の反応評定にあたって, 評定者に対しかなりの負担をかけることは否めない。さらに, WU-SCT は12歳以上の者に対して適用可能だとされているが, 日本人女性に対する宮下や佐々木らの研究は, 20歳前後までのみを対象としたものであり, 成人・老人女性との比較がなされていない。また Loevinger は, 男性用 SCT のマニュアルを公刊しておらず, 佐々木による日本人男性用の SCT (1981, b) も, その女性用との対応が十分に図られてはいない。そのため, SCT を用いた自我発達研究において, 今まで性差は十分に検討されてきたとはいえない。

そこで本研究においては、Loevinger (1970) に基づいて、文章完成法による自我発達段階測定尺度の日本人男性・女性版を開発することを目的とする。その際、1) 検査及びその評定を簡易化する、2) 男性版と女性版に共通性を持たせる、3) 広い年齢幅の被験者層を用いる、ことの3点に留意する。

方 法

①質問項目の作成

文章完成法による自我発達段階測定尺度(以下作成者のイニシャルをとって WY-SCT と略す)を作成した。WU-SCT で用いられた36項目を原則として採用することにしたが、以下の手続により、日本版には不適当と考えられた項目は削除された。

TABLE 2 WY-SCT の27項目

1. 女性(男性)というものはいつも< >でいるべきだ。
2. みんなが私を相手にしてくれない時、私は< >と思う。
3. おおぜいの人と一緒にいることは私にとって< (～な)>ことです。
4. 私は< >ので、よく困ってしまう。
5. 女性(男性)の一番良くないところは< >です。
6. 普通男性(女性)は女性(男性)のことを< >と考えている。
7. 勉強するということは< (～な)>ことだと思う。
8. 男性(女性)は< >ので、女性よりも幸せである。
9. 私の父のことを私は< >と思う。
10. 妊娠(にんしん)している女性は< >と感じている。
11. 母にひどくしかられた時、私は< >と感じた。
12. 妻は夫に対して< (～で)>なければならない。
13. 私は< (～な)>人のことをかわいそうに思う。
14. いらいらすると私はよく< (～する)>。
15. 女性(男性)は< (～の)>時、幸せだなあと感じる。
16. 私の母がもっと< >ならいいのと思う。
17. 女性の身体は< (～な)>ものである。
18. 他の子供の仲間に入ろうとしないで一人でいる子供を見たら、私は< >。
19. 女性(男性)というものは時々< >のことが心配になる。
20. 私は< >。
21. 私は男(女)の人と一緒にいるとき< >と感じる。
22. 職業につくことは女性にとって< (～な)>ことだ。
23. 子供にとって良い母親とは< >できる母親のことである。
24. 私は時々< (～する)>ことができればいいのと思う。
25. 母のことを思うと私は< >気持ちになる。
26. 私は欲しいものが手に入らないとき< >する。
27. < (～した)>時、私は悪いことをしてしまったと感じる。

* () 内は男性版における表現

まず、児童を対象とするには不適当と考えられた3項目が削除された。例えば、

33. Usually she felt that sex _____.

のような性に関する項目などである。

次いで、各項目の邦訳を WU-SCT の日本語版作成に関する宮下(1981)、佐々木(1981, a, b)の先行研究を参考に行った。この際各質問項目は、予想される反応に極端な偏りのない範囲において、できる限り反応の形式を限定するために、項目の空欄の後ろに原則として語尾をつけた。

また原語のニュアンスを失わない範囲で、できるだけ平易かつ自然な日本語を用いて表現するために、一部表現内容の変更を行った。例えば、

35. My conscience bothers me if _____.

→< (した)>時、私は悪いことをしてしまったと感じる。

というようにである。

この時点で、残りの33項目について大学生と成人、計50名を対象に予備調査を行い、日本語として表現の不自然な項目、回答に極端な困難さを伴うと報告された項目等の修正・削除を行った。修正方法としては、表現をより適切なものに改めたほか、男性版と女性版とで、人称代名詞の性が異なる項目を、7つ設けることにした。なお、以上の手続では修正不可能と考えられた5項目については削除された。

さらに、後述する評定の過程においても、多彩な反応を引き出しにくいと考えられた1項目(私の一番良いところは< >です。)が削除される。

以上により、最終的に WY-SCT 27項目が決定された。男女版の各項目が、TABLE 2 に示されている。

②調査対象

愛媛県下の公立小学校5・6年生(以下" P群" と呼ぶ)、同県下公立中学校2年生(J群)、同県下公立高校1年生(H群)、大阪府及び奈良県、滋賀県下の国立大学生(主に3, 4年生; U群)、同府県下及び三重県・愛媛県下の成人(20, 30代を" YA群", 40代以上を" OA群")の計650名が対象とされた。小・中学校は、学力の面において平均的な公立学校であり、高校はその地区の有名進学校であった。

なお有効回答のうち、成人女性は、YA群が教師(19名)、主婦(17名)、会社員(15名)、看護婦(14名)、その他(6名)により構成され、OA群が主婦(37名)、会社員(9名)、教師(5名)、看護婦(3名)、その他(4名)により構成されていた。成人男性は、YA群が教師(13)、会社員(11)、自営業(3)、その他(3)、OA群が会社員(17)、

教師(10), 自営業(2), その他(5)である。

③手続

小, 中学校では, 担任教師を通じ授業時間を利用して一斉に配布し, 実施した。高校では生徒に配布した後持ち帰ってもらい, 翌日回収した。大学生及び成人については, 郵送ないし手渡しにより個別に依頼し, 後日回収した。実施期間は1987年6月～7月。

回収後, WY-SCT の項目の4分の1にあたる7項目以上が無記入のものについては, 検査に対する動機づけが不十分であったと見なし, 無効データとして削除した。ただし, "ない"等の記述は, 何らかの自我段階を反映していると考えられるため, 無記入としては扱わなかった。

その結果, 612名分のデータが有効とされ, 以下の分析の対象とされた。年齢群別の内訳は, TABLE 3に示されている。

TABLE 3 被験者の男女・年齢群別内訳

年齢群	小学生	中学生	高校生	大学生	20-30代	40代以上	計
女性	48	41	64	51	71	58	333
男性	45	45	89	36	30	34	279

④評定マニュアルの作成

Loevinger 自身による SCT 評定マニュアルや, 佐々木によるマニュアルについては, 女性版は完備されているが, 男性版は十分であるとはいえない。そのためまず, Loevinger や佐々木のマニュアルを参考に, 女性版 WY-SCT の評定マニュアルを作成し, それに基づいて男性版のマニュアルを作成するという手順を踏むことにした。これは, WY-SCT の男性版と女性版の項目内容がほとんど同じだからである。

a. 女性版評定マニュアルの作成

<項目評定>

評定に先立ち, あらかじめ Loevinger (1970), 佐々木 (1981, a), 宮下 (1981) による評定マニュアルから, 評定に関する一般ルール及び各項目の反応例をひろいだし, WY-SCT 評定マニュアル Version 1 を用意した。

この時, 佐々木 (1981, a) にならって, 前社会的共生的段階と統合的段階を除く, 8段階について評定マニュアルを作成することにした。また反応例としては, 類似した反応パターンを示すもの(カテゴリー反応)と, 具体的な反応を示すもの(具体的反応)の2水準を採用した。具体的な反応を, マニュアル内では括弧でくくってカテゴリー反応と区別することにした。また評定の助けとなるように, 部分的に注釈が< >を用いてつけられている。これらの例を TABLE 4 に示す。

TABLE 4 WY-SCT マニュアル例

8. 勉強するということは< (～な)>ことだと思う。
I-2: (大変だ, 難しい, いや)
△: (よいものだ, うんざりする, しんどい, 苦しい)
△/3: (学校で習う, 覚える)
I-3: (大切な, 必要な, 役にたつ, 重要)
(素晴らしい)
(教養を高める, 知識を得る, 立派な人を作る)
(幸せな, 楽しい, 面白い)
(わからない)
I-3/4: 自分にとって, もしくは生きてゆく上で必要
自分を高める<漠然>
いろいろな事を知る
(当然, 当たり前)
批判 (あまりに偏重されている)
自分との闘い, 忍耐努力を必要とする
I-4: 批判 (自分に興味があること以外をするのはムダ,
知識だけでなく心を学ぶ, それ自体が目的ではない)
個性, 才能を伸ばす
人間としての基礎作り
両面的な価値・感情 (大切だが苦しい)
I-4/5: (一生続く)
(あらゆる場面で関係する)
I-5: 個人と社会に関連したこと
同一性の達成に関わること

マニュアル Version 1 に基づき, Loevinger 理論に習熟した2名の評定者が, 333名分のデータを独立に評定した。評定者間一致率は, 74.3%であった。不一致部分の評定については2者間で協議の上, 最終的に決定した。

なおその過程で, マニュアル内に曖昧であると思われる表現がいくつか見いだされ, またしばしば見られる反応でありながら, マニュアルに記載されていないものもみられたため, 必要と思われる範囲内でカテゴリーの増減, ないし表現の明確化をはかった。このようにして WY-SCT 評定マニュアル Version 2 が作成された。

<総合評定 (TPR)>

項目ごとの評定に基づき, 最終的に, 総合評定としての自我発達段階 (Total Protocol Ratings; 以下"TPR"と略する) が決定される。Loevinger (1970) はその方法として, 「得点法」, 「モード法」, 「最大値法」など幾つかの可能性がありつつ, 「累積度数分布法」を経験的に最も優れた方法であろうと結論づけている。そこでここでは, この累積度数分布法によることにした。ただしその基準となる度数は, 本実験において用いられた WY-SCT の項目数に応じて修正されている (TABLE 5 参照)。

<項目反応の一貫性>

各被験者ごとに TPR を算出した後, TPR に対する

TABLE 5 WY-SCT における自我段階の
総合評定 (TPR) 基準

I - 5 = I - 2 から I - 4/5 までの累積度数が 23 以下
I - 4/5 = I - 2 から I - 4 までの累積度数が 22 以下
I - 4 = I - 2 から I - 3/4 までの累積度数が 18 以下
I - 3/4 = I - 2 から I - 3 までの累積度数が 16 以下
I - 2 = 少なくとも I - 2 に 4 つの反応
△ = I - 2 から △ に 少なくとも 5 つの反応
△/3 = I - 2 から △/3 に 少なくとも 5 つの反応
I - 3 = 上記の何れにも該当しない場合

＊この基準は常に上から適用される

各項目反応の一貫性について検討した。これは、マニュアルに記載されたカテゴリー反応及び具体的反応が、適当な自我段階へ位置づけられているかを検討するためである。

用いた WY-SCT のデータは、女性の各年齢群よりランダムに選び出した 30 名分ずつ、計 180 名分である。各項目ごとに、TPR を外的基準とし自我段階を説明変数として、林の数量化 2 類による分析を行った。それぞれの第 1 軸において与えられた数値の順に、自我段階を並び変えてみると、本来の自我発達段階の順序 (I-2 より I-5 に至る) とは異なってくるところが生じた。順序が 1 つ入れ替わるごとに 1 ポイントとみなし、2 ポイント以上のくいちがいがみられた項目を、以後の検討の対象として選び出した。7 項目がそれに該当した。

またこの分析においては、説明変数の度数が 5 以下にならないように、隣り合った複数の自我段階を組合わせて調節しておいたが、(私の一番良いところは< >です。)という項目は、3 段階にしか分かれなかったため、先のポイントの基準からみる限りは不適当な項目には該当しなかったものの、引き出される反応に偏りがあるのではないかと考えられたので、以後の検討対象に含めることにした。

対象となった合計 8 つの項目について、女性 333 名分の反応を各項目 20～30 の類似反応に分類した。それを説明変数とし、TPR を外的基準として、先と同様に林の数量化 2 類を行った。これで得られた各類似反応に対する重みづけ得点の相対的位置を、マニュアル Version 2 において位置づけられた段階と比較し、極端に食い違いのみられた反応については修正・移動した。なお先の (私の一番良いところは< >です。)という項目については、反応の出現度数にやはり極端な偏りがみられ、項目自体が自我の多段階にわたる反応を引き出しにくいのだと結論づけられたため、この時点で削除された。

以上の手続により、女性版 WY-SCT 評定マニュアル

Version 3 (以下、単に“女性版評定マニュアル”と呼ぶ) が作成された。

b. 男性版評定マニュアルの作成

男性版と女性版とで異なる 7 項目について、まず男性 279 名分のデータを 20～30 の類似の反応に分類した。それを、女性版における対応する項目反応と比較し、男性特有の反応であると思われるものは追加し、女性特有であると思われるものは、男性版評定マニュアルからは削除した。

この後、女性版の時と同じ 2 名の評定者によって各項目反応が独立に評定された。評定者間一致率は、78.2% であった。評定の過程において、男女共通の 22 項目の内に、男性特有で出現頻度も高い反応が新たにみられた項目があり、これらについては、男性・女性版双方に反応例を追加した。

以上の手続により、男性版評定マニュアルが作成された。なお、男性における TPR の算出基準は、女性におけるもの (TABLE 5 参照) と同様である。

結果と考察

①一貫性及び評定者間一致率からみた信頼性の検討

男女を合わせた 612 名分のデータについて、評定された 27 項目の自我段階 (I-2～I-5 の 8 段階) に 1 点から 8 点を与えて得点化し、主因子法による因子分析を行った。その結果、第 1 因子の固有値が 6.87 (寄与率 25.5%) で、Loevinger (1970) により報告された同様の値 (7.5～9.8) よりやや低い、第 2 因子 (固有値 1.19, 寄与率 4.4%) 以下との間には、固有値において隔たりがみられ、一因子性の強いことが確かめられた。また 27 項目全てがこの第 1 因子に少なくとも 0.3 以上の負荷を持つことが示された。なお、男女別に行った因子分析においても、同様の傾向がみられている。

次いで Cronbach の α 係数を求めたところ、 $\alpha = 0.851$ (男性のみでは $\alpha = 0.853$, 女性のみでは $\alpha = 0.842$) が得られた。

これらの結果は、WY-SCT の一貫性の観点における信頼性を示しているとみなしてよいであろう。

次いで女性のデータについて、各年齢群ごとに 10 名分 (計 60 名分) をランダムに抽出し、Loevinger の自我発達理論について予備知識を持たない、心理学専攻の大学院生 2 名 (K, M) に、女性版マニュアルに従い独立に評定することを依頼した (以下、各々の評定値を“評定 K”, “評定 M” と呼ぶ)。先述の 2 名の熟練した評定者による評定 (以下、“基準評定” と呼ぶ) との一致率を求めたところ、評定 K で 72.3%, 評定 M で 70.5% であった。また評定 K,

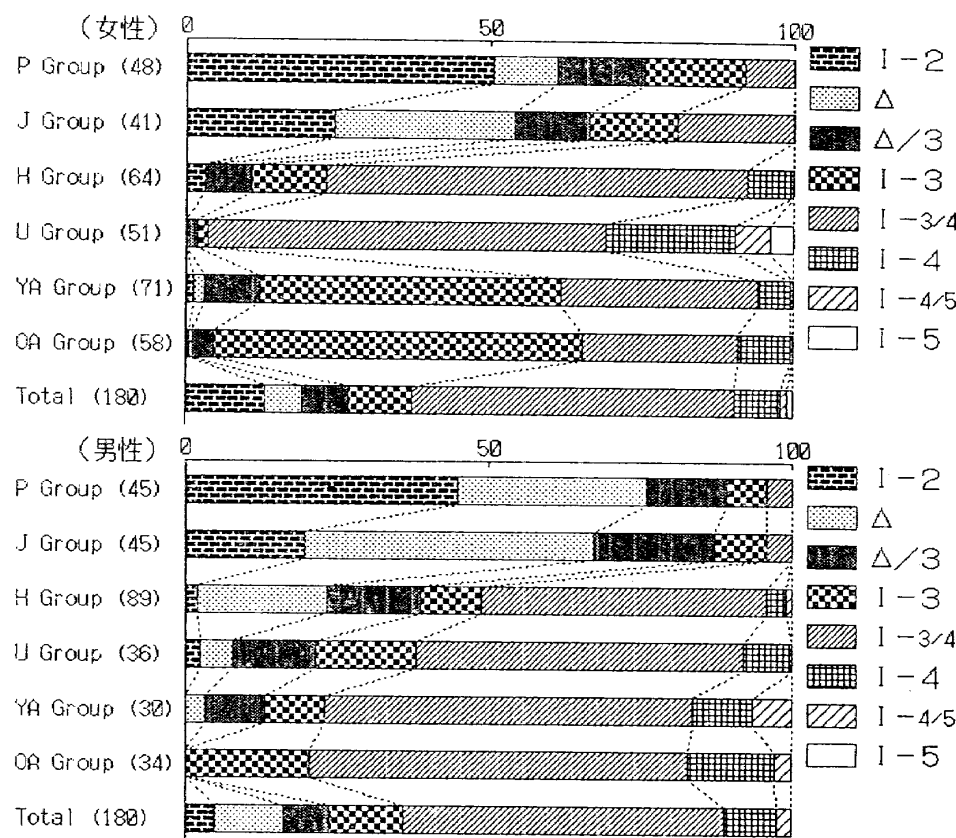


FIG. 1 TPRの男女別・年齢群別分布

MのTPRを算出し、基準評定によるTPRとの一致率を求めたところ、評定K、Mとも73.3%であった。

このことは、WY-SCTの評定マニュアルが、評定の初心者にとっても、一貫した評定を可能とするものであることを示している。また佐々木(1981,a)は、評定者の訓練として「Loevinger理論の学習、マニュアルの数回にわたる通読、10人分のSCTの反応評定例に基づく評定練習」を課しているが、WY-SCTにおいては、マニュアル使用法の簡単な説明のみで、佐々木による結果(一致率; 64~91%)に近いものが得られた。このことより、簡易な検査の作成という本研究の目的は達成されたといえよう。

②年齢に伴う推移

TPRの男女・年齢群別分布及び、男女各年齢群よりランダムに30名ずつ、合計180名分のデータについてTPR分布を示したもの(Total)とが、FIG.1に示されている。女性についてみると、大学生までは年齢の推移に伴って、より高い自我段階の比率が増大しているが、成人群においては高校生・大学生群よりも、I-3段階が増加し、それより上の段階が減少している。これはBlasi, A****が「LoevingerらのWU-SCTスコアは知能と

**** Loevinger, J. and Wessler, R. (1970)に記載されている。

関連を示す」と指摘したように、成人女性群には、中学卒、あるいは高校卒の教育歴の者を含む可能性があったために、知能の点において同質性を欠き、自我段階の下の者を含むことになったせいであると考えられる。さらに高校・大学生群を、いわゆる一流校から抽出したために、知能水準のちがひによる自我段階の差が広がったのであろう。一方男性に関しては、高校生になるとI-4段階の者が現れ、20~30代の成人群でI-2段階の者がみられなくなり、40代以上ではI-3段階以下がいなくなるということが示されている。こうした違いが、真に自我発達の性差に起因するものかどうかは、対象となった成人群の母集団が男女で異なるために、ここでは断定し得ないし、男女のTotalの比較においては、両性の間にTPR分布の有意差がみられていない。こ

の点をより明らかにしてゆくには、教育歴や経済的地位などの属性を厳密に統制した、男女間あるいは年齢群間の比較研究が必要とされる。

ただ男女とも、年齢の推移に伴って、より上位の段階の占める割合が増大していく傾向があるとはいえるだろう。これは、Loevinger (1970)や宮下 (1981)、佐々木 (1981,a,b) が示した結果を支持するものである。さらに、日本人女性において、20歳以降はI-3、I-3/4段階が大半を占めるという結果は、宮下 (1981)や佐々木 (1981,a) の調査結果と一致している。これらのことより、本研究において新たに作成されたWY-SCTも、認識の準拠枠として定義される自我の発達を測定しているのだと考えられた。

しかしながら、このことがすぐさまWY-SCTの十分な妥当性を示すわけではなく、今後、縦断的な研究及び、他のさまざまなパーソナリティーの側面との関連性の検討などが必要とされている。

引用文献

- Loevinger, J. 1966 The Meaning and Measurement of Ego Development. *American Psychologist*, 21, 195-206.

- Loevinger, J. 1969 Theory of Ego Development. In
Breger, L. (Ed.), Clinical Cognitive Psychology :
Models and Integrations. Englewood Cliffs, N.
J. : Prentice-Hall.
- Loevinger, J. and Wessler, R. 1970 Measuring Ego
Development I. San Francisco : Jossey-Bass.
- Loevinger, J. 1976 Ego Development : Conceptions
and Theories. San Francisco : Jossey-Bass.
- 宮下一博・上地雄一郎 1981 Loevinger の自我発達理
論 ―理論の概要とその測定法の我が国への導入―
広島大学教育学部紀要, 第1部, 第30号, 225-235.
- 佐々木正宏(a) 1981 SCT による女子青年の自我発
達の測定 教育心理学研究, 29, 147-151.
- 佐々木正宏(b) 1981 成人男子の自我発達 東京大学
教育学部教育相談室紀要, 4, 131-137.

付 記

本研究の調査にあたりご協力いただきました小・中・
高等学校, および質問にお答えいただいた多くの方々に
感謝致します。

論文の作成にあたりましては, 大阪大学 中西信男先
生, 千葉大学 宮下一博先生, 国学院大学 佐々木正宏
先生より貴重な御助言をいただきました。厚くお礼申し
上げます。また資料の整理を, 奈良女子大学大学院生,
小寺晶子さんと松林周子さんにお手伝いいただきました。
ありがとうございました。

なお, 本論文の共同執筆者である山本里花さんは,
1988年9月23日ご逝去されました。謹んで哀悼の意を表
し, ご冥福を心からお祈り申し上げます。

(1988年9月22日受稿)